

よつばほいくえんコラム 3月号

ねっせい

熱性けいれん

「熱性けいれん」は親にとって気になる心配事のひとつです。実際に熱性けいれんになることもは生後6カ月～6歳頃といわれ、半数以上が1回のみ、2回以上起こすこともが約3割、3回以上が約1割といわれています。

「通常38.0℃以上の発熱に伴って乳幼児期に生ずる発作性の病気、ただし他に発作の原因（脳炎や脳症、代謝異常など）がない場合」と定義され、脳が未熟な時期に急な発熱で脳がびっくりしてけいれんを起こすと考えられています。原因の感染症としては、インフルエンザやエンテロウイルス、突発性発疹、麻疹が有名です。

◆けいれん発作とは

多くは、両手足が硬くつっぱたあと、両手足がふるえ、白目をむき、唇が紫色になることもあります。意識がなく、名前を呼んでも反応しません。



◆けいれん時の対応

①時間をみる

けいれんが「はじめた時刻」「持続時間」を確認し記録する

②衣類をゆるめて、体を横向きにする（刺激は与えない）

抱っこやおんぶなどせずに寝かせ、嘔吐による誤飲を防ぐために顔を含めて体を横向きにします。

③口には何もいれない

④けいれんの様子を観察し、記録する

「目の向き」「手足の動き（左右差・ガクガク・つっぱる など）」

⑤発作がおさまったら、体温を測り記録する

けいれん中は測ることが難しいので、発作がおさまったら測る

⑥意識が戻ったか確認する

発作後、意識が戻ったか声をかけて確認し、はっきりするまでは飲食させない

はじめて見たときはとてもビックリし親も動揺しますが、この発作は2-3分でおさまることが多いため、まずは落ち着いて診断に必要なけいれん中の観察（持続時間やけいれんの様子）をしつつ、救急車（119）を呼びましょう。

こんな時は必ず救急車を呼びましょう



- ①短い間隔で繰り返し発作がおこり、この間意識がないとき
- ②体の一部分だけ、あるいは部分的に強い発作のとき
- ③意識の戻りが悪い、麻痺があるとき
- ④初めての発作で親がパニックになりどうしてよいかわからないとき

上記の状態がなく、数分以内にけいれんがおさまったときも、念のため医療機関を受診しましょう。夜間等の場合は、翌日で構いません。経過を記録した用紙を持って受診し、今後の対応についてかかりつけ医と相談しましょう。

◆熱性けいれん後の予防接種について

一般的に最終発作から3カ月経過をみたら接種は可能ですが、かかりつけ医と相談し決めましょう。また、予防接種の種類によってはお熱が出やすいものもありますので、接種前に相談しておく心安心です。

◆予防薬について

熱性けいれんは一生に1度だけのことが多いのですが、中には繰り返すこどもがいるので、親は熱が出る度にハラハラドキドキしてしまいます。ダイアップというけいれんを予防する坐薬もありますが、使用についてはかかりつけ医とよく相談し、適切な使用を心がけましょう。